ランボーの形而上学的闘争

金　崎　博　子

ランボーの詩人としての目標は,「見者」になることであった。見者とは,いわゆる「見者の手紙」によると，人間の経験できる現象界の背後に存在する超越的実在「アンコニュ(inconnu)」を自力で獲得する者の意と解することができる。彼は，見者となるために「全感覚の錯乱」という極めて実践的な方法を選び，この方法でアンコニュに到達して，それを詩でもって我々に伝達することにより，人類の救世主たらんことを欲したのである。

言うまでも無く，彼のこの見者の試みは，優れて形而上学的な探求であり，このことは何人も認める所であろう。古来，多くの詩人達が自らの作品の中に形而上学的願望を歌い込めて来たが，その探求にこれほど真正面から取り組んだ詩人は他に見られない。ランボーを際立たせ，彼に不滅の業績を残させたのは，一見狂気とも思えるこの見者の試みなのである。本稿では，専らこの試みが本質的に形而上学的探求であるということに焦点を当てて，この形而上学的探求は如何なる経過をへて，何に辿り着くかを見てゆきたい。

Ⅰ．第一の形而上学的闘争：見者の試み

まず，アンコニュ到達のために彼がなぜ「全感覚の錯乱」という乱暴な方法を選んだかを考察してみよう。我々の持つ知覚と理性という二つの認識能力は，前者は物質的な感性的世界を対象とし，後者は非物質的な叡智的世界を対象とする。ランボーの言う「アンコニュ」は，言うまでもなく非物質的，叡智的世界に属しており,知覚の対象となり得るものではない。ところが，理性の対象であるべきこのアンコニュに到達するためには，理性は消極的にしかそれに参加することができない。つまり，理性のもたらす概念的思惟は，いつまでたってもアンコニュについての不毛な定義以上のものをもたらすことが出来ないのである。理性をいかに働かせようと，彼は自分の望むような，アンコニュの絶対的把握に到達することはできない。だから彼は，「感覚」を越えた観念的本体を求めるために専ら「感覚」にその手段を求めざるを得なかったのである。「全感覚」を「錯乱」させることによって，常に我々を束縛し，我々に世界の外観しか見ることを許さない肉体的諸機能を狂わせること，これがアンコニュ到達の唯一の方法だと彼は信じたのである。

この見者の試みの実践の行程についてくわしく論じることは省くが,「地獄の季節」の「錯乱Ⅱ」に語られているとおり，彼は，不眠・飢餓・アルコール・アシシュ等，その他あらゆる手段を用いて肉体を虐げることによって，感官の機能を狂わせてゆき，ついには

それらが彼の望む通り正常な働きをしなくなる所までもってゆく。外界のごくささいな刺激も，彼の感覚に異常に鋭敏で狂った反応を起こさせ，彼は幻覚に悩まされるようになる。しかし幻覚は幻覚でしかなく，それ以上のものではない。やがて彼は，認識主体と対象を常に分離する役目を果たしている意識そのものがアンコニュ到達の障碍物となっていることに気づき，意識の喪失状態である眠りを羨望し，ひいては意識そのものの消滅を願うことになる。そしてついに，極度の衰弱状態の中で，彼は狭い自我の枠を破り捨ててアンコニュと合体する。この時，意識は最早アンコニュと彼とを分離してはいない。

> Je crus avoir trouvé raison et bonheur. (...) et je vivais, étincelle d'or de la lumière *nature*. (...) A cette (période, c'était) c'était ma vie éternelle, non écrite, non chantée, — quelque chose comme la Providence (les lois du monde un) à laquelle on croit et qui ne chante pas.
>
> (p. 169, *Brouillon de Délires* II.)

時空のカテゴリーから抜け出し，「生のままの黄金の火花となって生きた」その瞬間，つまり現象界の背後に実在する真理を獲得したと信じたその瞬間には，意識はその真理の中に溺れていなければならない。意識を拒否するこの形而上学的に充足した状態は，従って理性を超えたものであり，彼には自らの体験を理解することは不可能なわけである。彼自身，それを「信じる」ことができても「書かれも，歌われもしない」と言っている通り，勿論それを言語に還元することも不可能である。彼はアンコニュを，対象として外側から認識したのではなくて，文字通り，アンコニュと一体になって，アンコニュを生きたのである。

しかし，アンコニュは感官による直接的把握が可能であり，体験可能であるのに，理性による認識が不可能であるということ，これは我々の限られた人間の条件というものを暴露してはいないであろうか。

> Après ces nobles minutes, (vint) stupidité complète.
>
> (p. 169, Ibid.)

と彼自身語っているように，アンコニュは彼に至福の法悦状態と，言うに言われぬ形而上学的充足感Bonheurを与えたにしても，アンコニュを生きている時の外は，彼は「全くの痴呆状態」に甘んじていなければならないのである。自らの発見したものを人類に伝えるという見者の使命を全うするために，正常な意識の状態で，彼がアンコニュを理解しようとすると，アンコニュは直ちに彼を混乱状態に陥れてしまうのである。意識はアンコニュの中に溺れていたのであるから，それを認識し，説明する方法は残されてはいないのであ

る。彼は，認識不可能な形而上学的体験を理解しようとして，結局は形而上学的混沌に陥れられることになるのである。感覚を手段として，感覚を超えた実在を認識しようとする矛盾に満ちた見者の試み，すなわち彼の第一の形而上学的闘争は，このようにして見事に挫折することになる。そして，心身共に自らを虐げることで成り立っていたこの試みに敗れた時，彼は肉体的にも精神的にも極限状態にあり，死の恐怖に脅かされて，神に救いを求める。

Sur la mer, (...) je voyais se lever la croix consolatrice.
(p. 111, *Délires* Ⅱ.)

Si faible, je ne me crus plus supportable dans la société qu'à force de (pitié). (p. 171, *Brouillon de Délires* Ⅱ.)

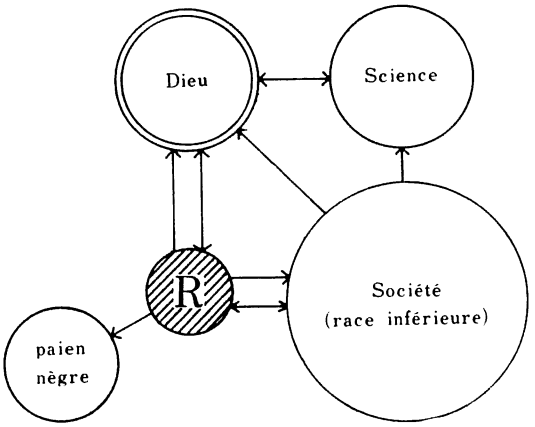
しかし，彼の慈愛の神へのこの帰還は，単に彼の衰弱のためばかりではない。形而上学的探求に携る者は必ず一度は真剣に神を考察せざるを得ないのである。

Ⅱ．第二の形而上学的闘争：「地獄の季節」

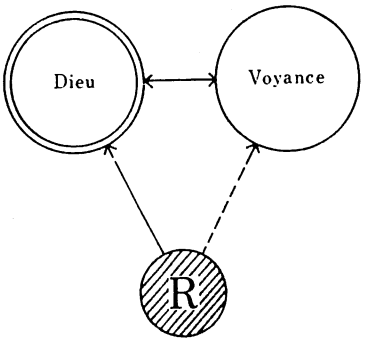
「地獄の季節」に於ける激烈な神との闘争が如何なる経過をへてもたらされたものであるかは，現在我々に残されている資料からは明らかにすることは出来ない。しかし，心身の危機から脱するための慈愛の神への帰還が，彼に神についての全面的考察を迫ったことは確かである。その結果，見者の試みに敗れ，形而上学的混沌に陥れられている彼は，結局の所形而上学的次元で神を問題にせざるを得なくなったのである。神を唯一の最高原理と措定し一切を委ねること，それは，キリスト教的世界観を排して現象界の背後にアンコニュを措定し，それを自力で入手せんとした見者の試みとまっこうから対立することである。混沌の中にある彼にとって，形而上学的次元で捉え直された神は，大きな光明であり得るし，又，自らの非力を十分に自覚している今の彼に対し，この神は絶大な力を発揮し始めるのである。しかし，人間の能力を超えるすべての問題を神に委ねること，それは，人類の非力を肯定し，自ら進んで人類の可能性を抹殺することである。見者の試みの挫折にもかかわらず，自力でこの宇宙の神秘を暴かんとする欲望を捨てることのできぬランボーは，たやすく神に服従することが出来ない。こうしてランボーと神との闘いが始まり，「地獄の季節」が生まれるのである。

「地獄の季節」におけるテーマの展開は，作者の混乱と懊悩を反映して，非常に痙攣的であり，錯綜したものとなっている。紙数の都合で，章ごとにくわしくそれを追ってゆくことが出来ないので，次の図[1)]を参考にして，各章のテーマの展開ぶりを追って頂ければ幸いである。

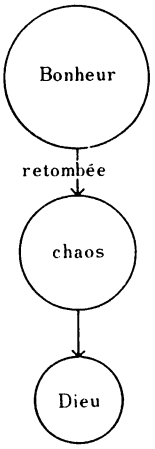
1. *Mauvais sang*



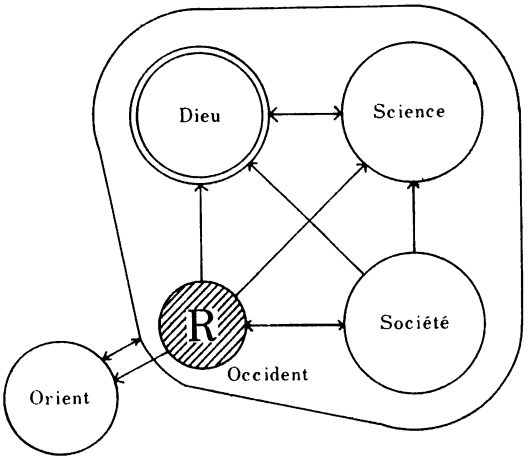
2. *Nuit de l'enfer*



4. *Délire* II



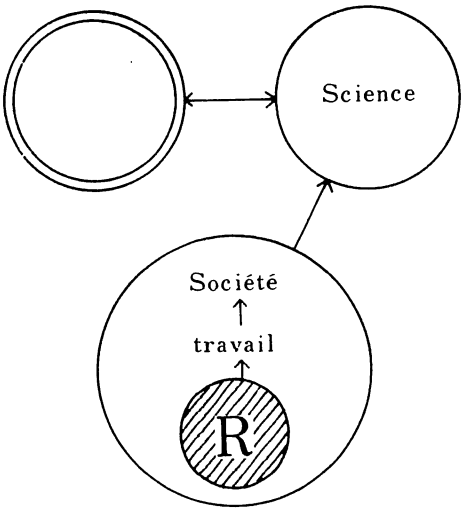
5. *L'Impossible*



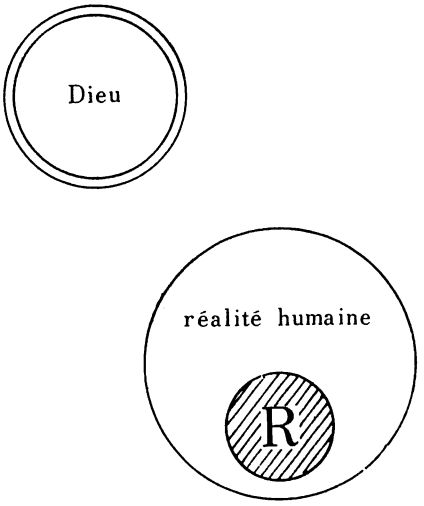
⟷ : antagonisme, ⟶ : fuite ou recours, - - - -> : fuite faible

: Rimbaud

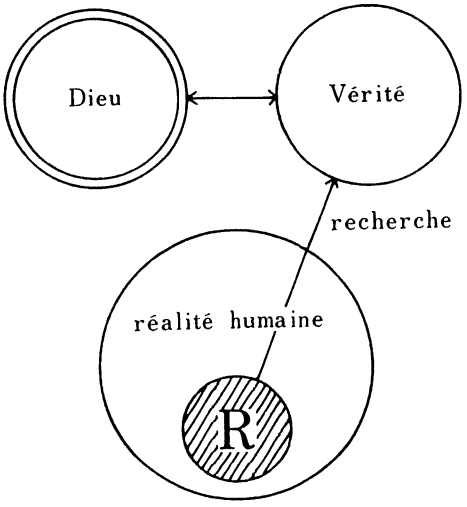
6. *L'Eclair*



7. *Matin*



8. *Adieu*



ランボーは，第一章「悪い血」に於いて，まず歴史を介在させることにより，「劣等種族」の名の下に己れを社会に組み入れ，そこで彼自身と神との問題を解決しようと試みる。この劣等種族とは，社会的にも精神的にも「劣等」であり，瀆神の徒でありながら時には神も求めるといった人々，つまり人間一般を指している。

> La race inférieure a tout couvert — le peuple, comme on dit, la raison; la nation et la science.
>
> Oh! la science! On a tout repris. (...)
>
> La science, la nouvelle noblesse! Le progrès. Le monde marche! Pourquoi ne tournerait-il pas?
>
> C'est la vision des nombres. Nous allons à l'*Esprit*.
>
> (p. 95, *Mauvais sang*)

19世紀後葉は，丁度科学万能主義思想の謳歌されていた時代であった。「我々は聖霊に赴く」という言葉は，この時代精神を鋭く端的に表わした言葉である。科学が宗教にとってかわり，人々は科学こそ人間の本性が要求する一切の説明を人間に与えてくれるであろうと信じ始めていたのである。「人類は，あらゆる形而上学がその現実性を失って，存在理由まで喪失する，そうした実証的，科学的時代に入りつつあった」[2)]のである。ランボーはこの時代思想を，自己の問題を解決する一つの手掛かりとして取り上げるのである。もし科学が一切を合理的に説明し，彼の求めたアンコニュでさえもやがて入手するとしたら，一体何を今更神など持ち出す必要があろう。だが，科学は物質的現象界に対してしか効力を持たない。科学は，いつかはその限度を暴露し，科学を補うものとして，あるいは解明するものとして形而上学を求めざるを得なくなるのである。人々は永久に神の問題から逃れられないであろう。ランボーはこのことを直覚的に見抜き，次のように言うのである。

> L'amour divin seul octroie les clefs de la science.
>
> (p. 98, Ibid.)

結局，科学の限界に対する直覚的理解は，彼が盲目的に大衆の列に伍することを妨げ，「劣等種族」という命題は早々に挫折し，以後は全くの一個人として神と対決せざるを得なくなり，希求と拒否の堂々巡りを開始するのである。科学が斥けられた以上，見者の試みによってもたらされた混沌を解明する手掛かりとなるものは，神のみしか存在しない。しかしながら，彼が神に求めるのは，この混沌の中から彼を救出することだけであり，この混沌と共に神への信仰に埋没し，永久に自己の問題を解決しないまま神の奴隷となることではない。神は服従を要求し，服従は自由を拒否する。彼はジレンマに陥り，出口無し

の状態で懊悩する他ないのである。

等2章「地獄の夜」では，彼は第一章の闘いを継続して科学を斥けて一個人として神と闘っている。ここで彼は，この出口無しの闘争から，かつての見者の世界への逃避行を試みるが，神とのこの不毛の闘争を惹起した混沌自体が，見者の試みの挫折によってもたらされたものであることを知っている彼は，見者の世界に絶対の価値を与えることは出来ない。それどころか，反対に，このような闘争の原因となった見者の試みとは一体何であったのかを検討せざるを得なくなるのである。そして「錯乱Ⅰ・Ⅱ」に於いて，彼は見者の試みをモラルにおいても，詩においてもはっきりと否定することになる。第四章「錯乱Ⅱ」において彼は，見者の試みを押し進めたあげく，どのような経過をへてBonheurと呼ぶにふさわしいアンコニュとの合体を体験したか，そしてその挫折の後，いかにして神に立ち返ったかを描き，今や見者の試みとか芸術とか詩とかはばかげたことだと結論を下してこの章を結んでいる。ここでは，見者の試みはその経過報告に終っており，彼が体験したアンコニュとは一体何か，その体験には如何なる価値があるかという，見者の試みの本質的問題点はいっこうに解明されていない。我々はこのことに十分留意しておく必要があろう。

さて，第二章で一個人として神と闘っても何ら答えが出ず，又，見者の試みもばかげたこととして否定せざるを得なかった彼は，第五章「不可能」に於いて，再び神か科学かという命題を蒸し返し，今度は東洋と西洋という見地から，キリスト教文明と科学を共に批判してみせる。しかし，西洋文明を批判し，実際には何の道も切り開いてくれない東洋を夢みたところで，何の役に立つわけでもない。一西洋人として，彼は再び神か科学かの選択を迫られ，科学の限界を直観し，科学文明を弾劾しつつも，それが神と対決する唯一の地上物だという理由で，科学にすがろうとするのである。しかし，科学は彼の望むような形而上学的次元に於ける性急な個人的救済などもたらし得るはずが無い。常に行き着く所は神しかない。又してもジレンマである。第六章「閃光」では，「労働」を通して社会に参加し，科学に自己救済の希望を託して緩慢な歩みを続ける人類の列に伍そうかと一瞬考え，すぐさま「科学は遅すぎる」としてその考えを否定する。そして，第七章「朝」に到ると，不毛の闘争に疲れ果てた彼は，神に服従する以外にこの地獄から抜け出る道の無いことに気づき，神と科学を問題にしてこれ以上同じ煩悶を繰り返すことを止める決心をするのである。ここで彼は，我々人間が限られた存在，神の「奴隷」でしかないことを十分に実感することになる。

これに続く終章「訣別」は，今後の方針をいまだ決しかねているランボーの心理状態を反映して，テーマが大きく揺れ動く。

まず前半で彼は，有限性を宿命づけられた一人の人間として，現実界であるこの地上に降り来たる決心を述べる。

(...) je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse

à étreindre! (p. 116, *Adieu*)

ところが，後半になると，この敗北感は勝利感へと移行する。

(...) je puis dire que la victoire m'est acquise (...) (p. 116, Ibid.)

(...) tenir le pas gagné. (p. 117, Ibid.)

彼がここで言う「勝利」とは何か。又，「勝ち取った地保」とは何か。「地獄の季節」に於ける見者の試みの自己批判は，皮相的なものに終始しており，先にも述べた通り，この試みの本質的問題点の解明とその価値付けは行なわれていない。ただ彼はばかげたこととして否定しているだけである。従って彼は，見者の試みを勝利と呼び得るわけが無い。又，神も科学も拒んで苦しんだこの地獄を抜け出す決心をしたのは，疲労と呆然自失からであった。そして，新生の希望の光は，人間であることの条件の認識から来るものであった。この時点で彼に勝利と呼び得るものがあるとすれば，それはただ，神を相手とするこの形而上学的闘争に自分はまだ決して敗北してはいないのだという自負心の蘇生のみであろう。

Il faut être absolument moderne. (p. 116, Ibid.)

近代的であること，それは正に民衆が科学でもって行っているように，彼は彼なりの方法で有限性と戦うことである。

Il me sera loisible de *posséder la vérité dans une âme et un corps.* (p. 117, Ibid.)

という「地獄の季節」のこの結語は，必ずやこの形而上学的闘争の答えを自分自身で手に入れてみせるという傲慢な神への挑戦の言葉である。彼が闘いを放棄せぬ以上，彼は自らの武器である詩を決して放棄することはない。

以上見て来たように，彼の見者の試みは，この現象界の背後に超越的実在アンコニュを措定し，それを入手せんとした点で，当初はそれと意識せずに行なわれていたとはいえ，正にその初めから，神に対する傲慢な叛逆の試みであったのである。有限性を宿命づけられた人間の一人として，彼の企ては挫折し，彼は形而上学的混沌に陥れられ，ここで初めて正面から神と対決することになる。言うならば，「地獄の季節」は彼の形而上学的闘争の一プロセスにすぎない。第一の闘争である見者の試みに於いて，彼は人間の条件を超克せんとして有限性の壁にぶつかり，第二の闘争である「地獄の季節」に於いて，その超越

性を我々に語ることによって，我々が常に有限なる存在でしかないことを警告し続ける神と戦うことになったのである。そして，この神との戦いを通して初めて，彼は人間の有限性というものを十分に思い知らされたのである。「地獄の季節」の最後に於ける，今度は自己の有限性を十分に認識した上での神への再度の挑戦，これが彼の第三の闘争の始まりであり，やがてイリュミナシオンの多くの作品を生むことになるのである。

Ⅲ．第三の形而上学的闘争：イリュミナシオンに於ける「真理」の探求

はたして彼は，自己の有限性を認めた上で，「地獄の季節」の結語で求めた「真理」を獲得する新たな方法を見つけ出すことが出来たであろうか。言うまでも無く答えは否である。人間である以上，有限性を乗り越えることは出来ない。この手段なき「真理」の探求，これがかつての見者の試みへと彼を押し戻し，彼をして今度は冷静にその試みを再検討させるのである。たとえ，「地獄の季節」に於いて一切の不幸の原因として見者の試みを全的に否定したとて，今の彼にとって，この形而上学的闘争の解答を見い出す方法は，正にそれが形而上学的探求であったという理由で，彼を混沌に陥れ，彼を神と戦わせることになった「見者の試み」というものを根本的に解明すること以外に無いのであるから。

(1) 模索と絶望

彼が「地獄の季節」の最後で入手せんと欲した「真理」とは，結局見者の試みに於いて彼が求めた「アンコニュ」と同じものに他ならない。両者共に，決して我々には明かされることの無いこの宇宙の神秘を暴こうとするランボーの形而上学的欲求を表わす言葉なのである。見者の試みに敗れ，神と戦って己れの有限性を思い知らされた後も，彼は同じ欲求を捨てることは出来ないのである。

イリュミナシオンの中で，この「真理」の探求にかかわりのある作品の一つに*Après le Déluge*がある。この詩の冒頭の数行は，「大洪水」の後みずみずしく蘇生した自然を描写しているが，この「大洪水」とは，現実界の大改革を願って行なわれた見者の試みと，その挫折の危機から脱出すべく行なわれた「地獄の季節」に於ける激しい神との闘争を指している。極めて観念的であった長く苦しい戦いから解放されて，一個の有限なる存在として一旦現実界に戻されてみると，彼の眼前では，彼の感性をはぐくみ育て，又彼がこよなく愛した自然が，かつてのみずみずしい生命力を湛えて力強く蘇るのである。しかし一方，「大洪水」で掘り起こされていた「宝石」，すなわち彼が見者の試みに於いて一瞬獲得したと信じた真理の象徴である「宝石」は，再び現実界の背後に身を隠してゆく。一転して，目を人間生活というものに向けると，そこには相も変らぬ労働と殺戮と快楽の追求がある。一旦現実界に戻されたとは言え，彼にはこのような日常性に埋没し，社会に参加して生きてゆくことは出来ない。大洪水の直後，すなわち「地獄の季節」の直後，観念の闘争に疲れ果てた彼を癒してくれた自然も，詩が進むにつれて，最早永遠に巡る季節の回帰を伝える一つの指標でしかなくってしまう。そしてこの詩は次のように結ばれるのである。

— Sourds, étang, — Ecume, roule (...). — Eaux et tristesses, montez et relevez les Déluges.

Car depuis qu'ils se sont dissipés, — oh les pierres précieuses s'enfouissant, et les fleurs ouvertes! — c'est un ennui! et la Reine, la Sorcière qui allume sa braise dans le pot de terre, ne voudra jamais nous raconter ce qu'elle sait, et que nous ignorons.

(pp. 121-122, *Après le Déluge*)

現実変革の試みが潰滅すると，彼はこの地上に「倦怠」しか見い出すことが出来ず，再び形而下的生活拒否の激しい闘争—「大洪水」を求めることになったのである。しかしながら，自己の有限性を認めた上で，今後どのような「大洪水」を起こし得よう。見者の試みをもう一度繰り返せば，再び同じ混沌に陥れられるだけであり，第一，肉体を虐げることで成り立っていたこの試みを，そう何度も繰り返せるわけが無い。新たなる闘争の手段を見つけ出すことの出来ぬランボーは，過去の苦い失墜を思い起こし，又，現在の苦悩をかみしめつつ，我々の置かれているこの宇宙を支配する法則の謎を知る者であり，かつて彼が求めたアンコニュの象徴，今の彼にはあの「真理」の象徴である「女王・魔女」は，決して我々にその秘密を語ってくれようとはしないとうたうのである。

この作品は，「地獄の季節」からイリュミナシオンへと続く第二，第三の闘争のつながりを語る重要な作品であり，正しくイリュミナシオンの冒頭に置かるべき作品と言えよう。彼の第三の闘争は，ここに語られているように，最初から絶望に満ちたものであった。

もっと直截にこの手段なき真理の探求の苦悩を歌っているのが*Angoisse*である。さきの「女王・魔女」は，ここでは「吸血鬼」というより陰惨なイマージュで表わされ，彼の苦悩が一層深まったことを物語っている。ここでも又彼は，我々の条件である有限性に対するいらだちを歌い，もしその超克を目指して行動を起こすなら，見者の試みで演じたあの「架空のオペラ」以上の，もっと「滑稽」な一人芝居を演じなければならないであろうと苦々しく歌っている。

これら二つの詩は，両者共に，明確なる指針を持たぬまま再び形而上学的闘争を始めざるを得なかった彼の，指針を求めての苦悩の時期の作品である。両者共に，見者の試みで獲得したものを，否定しつつも，「宝石」あるいは「勝利」と呼び，問題解決の糸口は，かつては一つの極点に達したこともある見者の試みの根本的な解明そのものにあることを示唆している。

(2) 見者の試みとは何であったのか

このように，新たなる闘争の手段を発見することが出来ず，いたずらに苦悩を深めていたランボーは，やがて，挫折したとは言え，一度は彼を神に比肩する者とさえしたあの見者の試みとは一体何であったのか，神との闘争を招き，彼を地獄に陥れた見者の試み，そ

の極点に於ける神秘的体験とは一体何であったのかを，今度は冷静に解明，評価することで，この出口無しの第三の闘争に突破口を開こうとするのである。こうして作品*Conte*が生まれる。

*Conte*は明らかに見者の試みを寓意的に描く作品である。その主人公「王子」すなわちランボーは，「広大な人間的能力を所有する」故に，人間がおかれている形而上学的不満足の状態に甘んずることが出来ず，「真理」や「本質的欲望とその満足の時」を見たいと望み，現実界の根本的改革を欲していたと語り始められる。ところが現実界は，この王子の努力にもかかわらずいっこうに改革されず，又，彼の企ても人々に理解されることは無い。彼の願いを実現するには，まず彼自身，天上から火を盗み，それを人々に与えることから始めねばならない。この目的を達成するために見者の試みを押し進めた結果，彼は次のような体験をする。

> Un soir il galopait fièrement. Un Génie apparut, d'une beauté inéffable, inavouable même. De sa physionomie et de son maintien ressortait la promesse d'un amour multiple et complexe! d'un bonheur indicible, insupportable même! Le Prince et le Génie s'anéantirent probablement dans la santé essentielle. Comment n'auraient-ils pas pu en mourir? Ensemble donc ils moururent.
>
> (p. 125, *Conte*)

王子の出合った「聖霊」とは，ランボーが到達せんと欲したアンコニュであり，「地獄の季節」の草稿では，「天啓」，「宇宙の法則」のようなものと呼ばれていたものである。王子はこの聖霊との邂逅に於いて，「本質的健康」すなわち形而上学的に充足した状態に達するわけであるが，先にも述べたように，意識をその対象アンコニュの中に没することによってしかこの状態は得られず，まして知性や言語はここに介在し得るものではない。彼はこの出合いを信じることは出来るが，言葉では説明できないのである。彼に出来るのは，せいぜい否定的言辞でもって「言うに言われぬ」，「名状し難い」etc. と，その言語に絶する様を描写することだけである。それに，もし意識がアンコニュの中に消失していたのなら，一体どうやって対象であるアンコニュを捉え得たであろう。意識の消失は死に等しい。死人にとっては，いかなる対象も存在しない。王子という認識主体の意識がその機能を停止すれば，その意識の対象である聖霊も当然消失する。だから，「王子」と「聖霊」，すなわちランボーとアンコニュは，「本質的健康」すなわち形而上学的に充足した状態の中に，どちらもその存在を「消失した」のである。たとえランボーが，確かに自分は宇宙真理を生きたのだと言い張ったところで，彼の獲得したアンコニュは，論理上は存在し得ないのである。

Mais ce Prince décéda, dans son palais, à un âge ordinaire. Le Prince était le Génie. Le Génie était le Prince.

La musique savante manque à notre désir. (p. 125, Ibid.)

もしランボーが，極度の衰弱を代価として得たこの体験を，更に追求しょうとしたなら，彼は実際にこの時死ぬしかなかったであろう。「全感覚の錯乱」という乱暴な方法は，彼を死の一歩手前まで追いつめていたのである。しかし実際の彼は死に反抗し，天寿を全うして「世間ありきたりの年で」死ぬことを選ぶ。地に戻された彼は，合理的かつ客観的に検討するなら，アンコニュは彼の作り出したイリュージョンでしか有り得ず，結局求める者が作り出した求められるものに過ぎないと結論を下さざるを得ないのである。そして，この詩を結ぶにあたって，真理を見たいという本質的「欲望」を満たすには，見者の試みという不条理な企てに身を投じる他はなかったと付け加えるのである。

「地獄の季節」では未解決のまま残されていた，見者の試みの最も重要な問題点，アンコニュ体験とは何であったのかという問題がここで明らかにされる。結局彼はそれをイリュージョンとして否定し，実際に彼がアンコニュを生きている時でさえも論理上アンコニュは存在し得ないと結論を下さざるを得ないのである。

出口無しの第三の闘争に突破口を開くために再検討された見者の試みも，ここであっけなくその価値を否定され，彼は再び出口無じの状態に戻される。では，ここで彼は直ちに自らの敗北を認め，見者の試みに何の価値も認めず，神に降伏したのであろうか。否であろう。何度否定してみても，いつまでも彼の内にくすぶり続ける勝利感，自分はとにかく何かを成し遂げたのだという勝利感，これが彼に見者の試みを正統に評価するための最後の努力をさせ，*Génie, A une raison*を書かせるのである。

Génie に於いて，彼は見者の試みを神に対する人間の主体性奪還の試みとして定義し，この試みを強く肯定する。自らかくあらんと欲した存在見者，すなわち人間の真にあるべき姿をその「可能な最高の限度」[3] に於いて具現する存在Génieは，万物の原因として神を措定し，それに依存する存在ではなく，己れを万物の完全なる尺度とし得る存在であり，有限性を超克したその限り無い力に満ちた姿を我々に示すことにより，人類に向って，神への言われなき服従から立ち上がり，正当な自己信頼を取り戻して真に充実した生を目指して歩み始めよと訴えるのである。確かに見者の試みは，ここでランボーの訴えるごとく，神に対する人間の真の自立の試みとして高く評価し得るものであろう。だが彼は，ここに描かれたような真の見者になり，アンコニュをこの世に持ち返って人類を救ったわけではない。彼は見者の試みの極点でアンコニュを垣間見，自らを一瞬無限なる者と感じたけれども，正しくその時点で，彼は伝達可能な世界を超えたのである。*Conte* に語られる通り，勝利は永遠に彼のみの確信でしか有り得ず，アンコニュを実際に持ち返ることが出来ぬ以上，かつて一瞬そうであった存在を今*Génie*として言葉に定着することにより，彼はせめ

ても「他の恐るべき労働者たち」に歩むべき道を示し，彼に続け，あるいはもっと先へ進めと言っているのである。彼自身は，もうこれ以上進めない所まで行ってしまったのである。

(3) 「真理」の探求の放棄

Génie に於ける見者の試みの強い肯定と高い価値付け，これが今の彼に出来るすべてである。見者の試みは，つまるところ，二度と繰り返し得ぬaction métaphysiqueであり，「真理」を獲得するそれ以外の新たな方法を発見することの出来ぬ彼は，結局，*Conte*と*Génie*を書くことによって，第三の形而上学的探求に不可能という解答を出さざるを得ないのである。彼は再び有限性の壁に突き当たり，地上に戻されることになった。この時点で書かれた詩が*Vies*であろう。ここで彼は，見者の試みを，*Conte*, *Génie*に共通する「愛」あるいは「音楽」という言葉で定義清算し，第三の闘争の放棄をうたっている。この第三の闘争の放棄は，取りも直さず見者の試み以来ずっと継続していた長い形而上学的闘争の最終的放棄でもある。イリュミナシオンに於ける第三の闘争は，彼の第一の闘争である見者の試みの挫折の確認とこの試みの高い価値付けによって終ったと言ってよかろう。神に対する人間の主体性奪還の試みというその評価は，「地獄の季節」に於ける神との戦いを経て初めて可能になったことは言うまでも無い。見者の試みは，このイリュミナシオンに於ける挫折の確認とその高い評価によって，一つの試みとして完成するのである。感覚でもって，感覚を超えたこの宇宙の神秘を暴かんとする，優れて形而上学的であった見者の試みは，このようにして終わりを遂げる。

注

Texte: Oeuvres complètes de Rimbaud, édition d'A. Adam, Paris, Bibliothèque de la Pléiade, 1972.

1) *Délires I.*は，ここで我々の追求するテーマとは直接的なかかわりを持たないので，図から省いた。
2) G. Duby et R. Mandrou, *Histoire de la civilisation francaise,* Tome Ⅲ, 人文書院, 1971, p. 125.
3) Y. Bonnefoy, *Rimbaud*, Paris, Seuil, 1967, p. 147.

(旧姓山中 D. 在学中)